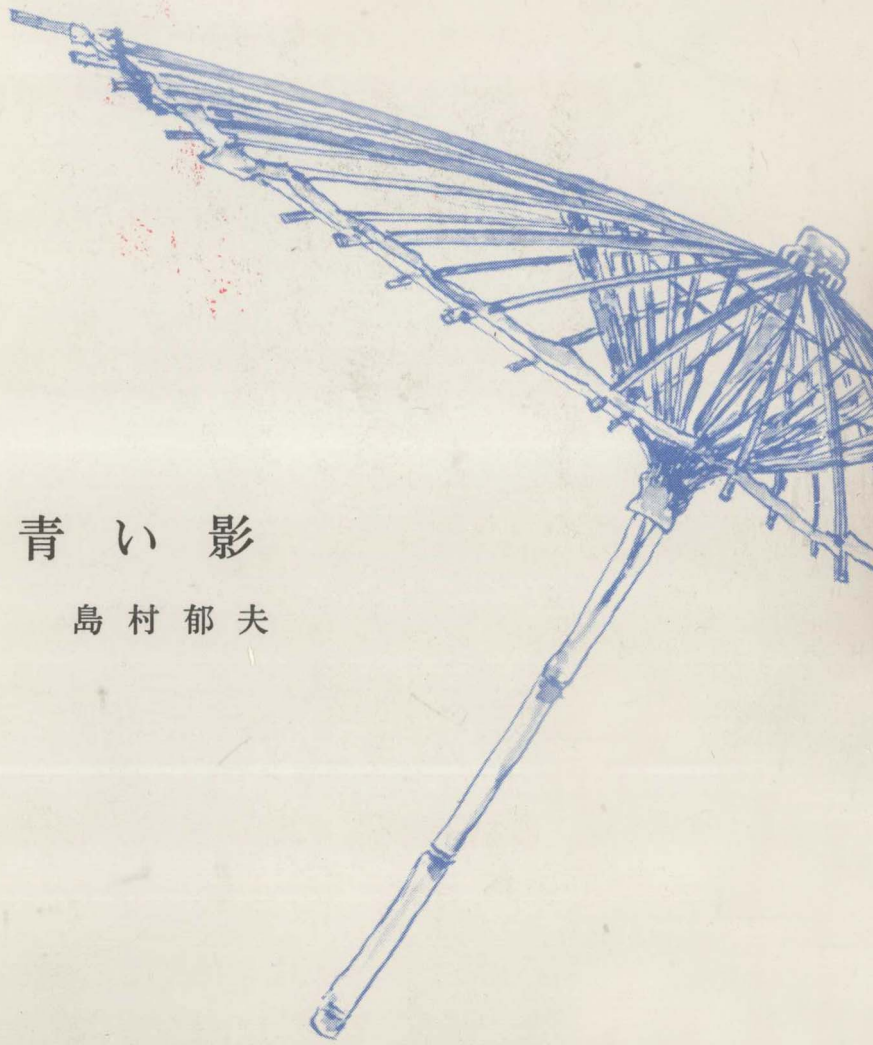


青い影

島村郁夫



青い影

島村郁夫

日本

協公

青　い　影（270冊刊）

平成九年十二月九日発行

（平成八年八月十八日起版）

著　者　島　村　郁　夫

印　刷　木　村　啓　一

装　幀　森　　　昭　典

発行所　・　提灯屋発行所

熊本市東町三丁目 6―11―11

水野兼次方

中学二年の夏休みのあと、学校としては教室が三ツ足りなくなったらしい。一学期はそのまますぎて九月になって、どうして教室を三ツ都合しなければならなくなったのか、もう昔々のことになってしまつて、そのときの先生も、あらかた定年で、どこかへ去つてしまつて、いつかその理由をたずねてみたいのだが、そのいつかというのは、まったくアテにならない。なぜ九月になつて各学年で一ツの学級を解散して、ほかの組へ、四、五人ずつ這入りこませるなどという無残

なことをやったのだろう。どの学級が解散になるか、くじ引きで決めることになって、学校の方針は、そういう風に決つていたにしても、形として一応生徒会（大仰にも生徒議会などと言つていたが）に諮^かつて、自主的に納得づくで決めようとなつたらしく、九月早々二期の学級の役員選^{せん}びがあつて、代議員とかいう役柄に始めて推された。学級委員には新顔の田代が選ばれ、一学期は田代が代議員をしていて、この役にだけバッヂがあり、その図柄は単か鳩が翼を広げていて中に明るい青の七宝が流しこまれていて、まん中に委の字が嵌めこまれてあり、そこは白字で、田代はそのバッヂを持つてきて机の上に置いた。それをつけて生徒会なるものに始めて出た。議場は音楽室が当てられて、学校側から希望の出ていた通り、各学年とも一学級を公開でのくじ引きで選^{せん}び、そこを解散するという風に事は運び出席していた代議員連の多数の賛成により、生徒たちもすゝんでそのことに参加するという恰好が整えられ、全校の者たちが古びた木造講堂に集つた。そのとき誰がくじを引くかということになり、二年四組では合議で楨が指名されそうな氣配だったから先手を打つて逃げた。こんな時は先に言つた方が前へ出るようになる。そのくじは先生に引いてもらおうと彼が言うと、皆、それはそうだ、それがいいとなつて担任の和木さんがくじを引くことになった。そして、十日か十一日か十二日頃だつたらうか、或いは十五日か、そ

れを過ぎてのある日だったか。風雨にさらされ、先の戦さでも焼け残った講堂に全校生徒が集ると、人の重みで床板が軋んだ。一学年が十組あったから、一年から三年まで三十人のくじ引き人が、横一列に自分の学級に向かい合う位置に並んだ。学年ごとに巻き紙になっているのを取った。幅四十センチ長さ一メートル位の白紙が巻いてあった。三十人がそれを持って元の所に戻って白紙の先端を持って、誰かの合図で巻紙を垂らすと、一年三年のことはいざ知らず、和木さんの手から垂れた長方形の紙には、あろうことかあるまいことか、何と墨黒々という手跡で解散の二文字が見えた。確率は十分の一だから、まさかの行き当りだった。そのとき和木さんはどんな表情をしていたろう。おとがいの尖った、利かん気の、長三角型の浅黒い顔には、どのような色が滲にじんでいたのだろうか。うすく口を開けて白い上歯を見せていたようだが、表情の動きはなかったように見えた。今にして推し測れば困ったな済まんことをしたなと考えていたのだろうか、見ている方にはわからず、ただ解散の二つの文字に半ば茫然としながら少し騒いでいたようだった。つらい儀式は終り、散らされる学級が三つ決って、本館一階東の端の北へ突き出た教室へ戻ってみると東側の窓ぎわ二列が女子席だったが、みな席に着いてみんな声をあげて泣いていた。それは異様な眺めではあったが、それだけのことはあるなと納得のいくありさまでもあった。女子は

講堂から走って戻って来たのだろうか。男子は腰掛けもせず泣いている方を見ていた。そのときから三十四年過ぎて、小学校が同じだったので顔見知りの遠矢と高校の同窓会で顔を合わせた。この男は三十四年前は、くじに当たらない方だった。その遠矢が話の途中で唐突に、その解散くじ引き集会に触れた。あんなことはすべきでないよといくらかきつい口調で言った。彼は新制の大学の理学部生物学科で勉強して高校の生物の教官となった。槇はそのとき目を瞠るような思いになった。この遠矢という男は、それこそ昔々の、言うならば些細な出来ごとを覚えていたのか。まして自分にはかわりなく通り過ぎて行った事柄を記憶していて、そしてその事柄にかかわり合って他の学級へ四人五人と分け組みこまれていった或る一つの学級のことを忘れずに居て、そして更に言うならば、その小さな渦の中に、いま目の前で自分と話している男が巻きこまれて別の組へと流れて行ったことまでも知っていて、そのように言ってくれているのか。これは稀有のことだった。たぐい稀れなことだった。もう殆んど有り得べからざることのようなものだった。自分の学級が解散にならずに済んだのなら、そのようなくじ引きがあつたかどうかまでは人は忘れてしまうのが殆んどだろう。遠矢の顔を正面から見た。ああいうことをすべきではなかったと彼は言った。教室が足りないのなら、たとえば学年の半ばの九月であつても全員をこきまぜて組替

えをやつて、仮りに一学年が六百人居たとしたら、これを九つに分けて六十六人編制の九学級に新たに作り替えないとねえ、くじを引かせて一つの学級だけを九つに分けて、残った学級に抛りこむつてえのは無茶な話だと言つたのだ。それは遠矢の言う通りだろう。彼が二十五年もの間、高校で生物を教えている、言わば現場の訳知り人であるだけに、三十四年を過ぎて今にして勞わられてゐるような、庇^{かば}われてゐるような、成り替つて文句を言つてくれているような風合いになつた。和木さんは担任だから自分の学級を九つに分けた。誰が何組に行くかを壇上から言つた。一組に行くのは伊藤と田代と楨、女子は大槻と水上の五人だつた。一組に行くことになつたがそこには小学校でいっしょだつた男子が十二、三人居た。二年一組は古泉^{こせん}校の六の一の移り變りのようにも見えた。旧知の顔がそれ程の数居るので安心だつた。一組だと言われたときは見つともない恰好をした。半ば腰を浮かしてこぶしを作つて右腕を上げた。安堵の思いからではあつたものの、そのはしたない仕草は思い返すごとに苦々しい。この中学の建物は以前は県立の商業学校だつたのを郊外へ移つたあと高等小学校として長く使われ、市立女学校が焼夷弾で燃えてからは、しばらくは東半分を使つていた。二階建木造の東西に長い校舎に、新学制の中学が出来て二回生として、その前の年の四月十四日に入つた。その十四日は曇り日で道路から高くなつた校地への上

り傾斜の敷石道を行くと正面に玄関があつて組み分け表が置かれてあり、四組になつてゐるのを確かめて左手の道を歩いていると、右手の一組の教室には古泉小六の一の者たちがすでに入つていて、オーイ何組になつたかアと声をかけた。そこには、つい三月三十日まで六の一で同じ教室に居た顔が五つ六つ窓からこつちを見ていたが、四組になつたと言うとソーカという具合で、その窓には茶山や楠田、佐村らが居た。一組には随分となじみの顔が並んだもんだな。六の一には六十人程居て中学の十の学級のうち一組にだけ十二、三人行つたというのは簡単に割算しても二倍の数になるわけで、そのとき一組の窓を見てあそこはいいなと心細い中で一瞬考えた。四組の担任は松木と言つてこれも三十四年のち遠矢から聞いたところによると、丸野という背の高い細面の、年が一つか二つ上のような感じの、半分位は大人になりかけた氣配の女生徒が居て、それを好きだったらしい。そう言えば思いあたる節があつた。一年三学期の学級委員を選んだら、野球でピッチャーをしていた井上がなり、女子では鹿毛かげという白面の、いつも淋しげな様子の子が投票で上位となり二票差で丸野が続いた。すると松木は二票差だから同点と同じだ、もう一回投票をやり直すと言う。そんなチョボイチがあるもんかとは思つたが、女は女だけで選ぶという仕掛けになつてゐたから黙つて見てゐると、やり直しの投票では丸野が一位になつて芽出たく学

級委員とはなったが、ひょっとすると開票のとき操作して手前勝手に丸野が一位になったと松木は言ってしまったのかも知れない。開票を自分一人で行き、丸野に票が集ったと言ひ張ったのはあるまいか。一年のとき秋十一月頃だったか昼の休みに鹿毛は教室のうしろの北向き窓に椅子を寄せて掛けていて窓外の校庭とその先の師範学校の校舎を一人見ていたことがあった。横を通りぬけようとして不図顔を見ると目に涙があつて今にも頬を伝ひそうだった。あれは何だったのかとそのあとも時々思い出したが、人は色んなことで泣くから何でだったかわからう筈もない。松木は二十六、七で独り身だった。どこか皮肉で、人の氣持を思いやる技に薄く足早に調子を取るようにして歩いた。その年の二月頃だったか古泉小の六年の終りの頃、同じ町内で野球のチームを作つていて他の町内のチームと試合したりしていた。われらの三町内チームは近くの、やがて四月になったら通ひ始める中学の校庭に行つては、その年の三月まで校舎の東半分を使つていた市立女子高校の生徒と試合をしたことがあった。そのとき、あとで思えばその女子チームに松木がついていて何だかんだと指図をしていた。ヒットを打つて一塁に走りこんだときはファウル線の外側に回ればアウトにならないが、内側へ回つたら二塁進塁と見分けがつかないからタッチされたらアウトになるなどと、そんなわかりきつたことを教えていて、その顔を覚えていて、

あ、あのときの男が今度の担任なのかと野球仲間の中山に言うと、うんそうだなと中山も松木を忘れていなかった。その丸野阿以子はやせてはいたが体のどこそこが丸味を帯びて中学一年の少女というよりはもう少し年上の娘のようで一年の終りの春休みに横浜に移って行った。松木もこの女が好きだったというのが初代の生徒会長にあがった三年生の野口も好きだったらしい。木造講堂前の踏み石のところに立っていると横に長い運動場の東の端あたりを丸野が自転車に乗って回っているのが見えた。それは見えただけで、となりの男と別の話をしていたら野口が不意に横合いから顔を出しておれと丸野のことを噂していたんだらうと気色ばんだ物言いで突っかかって来たのには閉口した。丸野は目鼻立ちは、まアきちんとしていたが、どこか狐の成り替りのような気配があつて背のひよろつと高い、日陰の桃の木のようなのが女子の中に居るなぐらいのところだったから、誰が好きにならうとなるまいと、そんなこたアどうでも良かった。野口は生徒会などという形ばかりの自治組織めいたものが上からの声がかかりで出来て会長をみんなの投票で決めようとなったとき三年からは一人野口が出た。あとは二年生で照山とか伊藤とか中村とかが出て賑わった。そしてどのような糸が手操られてのことか忘れてしまったが野口の応援を手伝って顔見知りにはなっていた。この男も丸野が好きらしいとわかつて、人の好みつてえなアどうしよう

もないな、あの丸野をねえといささか不思議な氣もした。会長には六四二票を集めた野口が三年生の面目をつなぎ、その次には秀才の照山が入ったが得票数は三二一で恰度半分だった。それから四、五年過ぎてののち人の噂で野口は、又もどこかの女が好きになつてはみたものの袖にされて先行き灯りを見失つたのか汽車で一時間程入りこんだ山地をさまよつては、とある木のかげに横たわつたまま弥陀の浄土へと行つてしまつた。女に惚れ易く振られ易いめぐり合わせだったのか、新制の大学に通つていて学業半ばのままの早仕舞いになつてしまつた。何もそれ程生き急ぐこともなかつたろうに洋々と開けた行くてを自ら閉し、ひとすじの思いに身を灼いてこの世を見限つてしまつた。はた目には如何にも勿体ない氣もするのだが、そこがそれ陽物を下げた男の男たるゆえんであつて、かかる一途さゆえにヒト科の個体数は地球を掩うまでに増えたのであろう。そう言つてしまつては理に落ちてミもフタも無からうが、若い日の深情は用心するに越したことはない。一度つきりの人生というからには、俺のことだ口出しはいらねえよと威張つてみても命あつての物種だもんなア。そして松木のことになるのだが、この男には、どこか寧猛で無残で情知らずなところがあつて、いつか安武と大群が喧嘩したときはいかにもそんな場面を待つていたかのように細い目を一層細めて淡く緑のまじつた肌色の顔を二人に向けたまま、改めて教室の机

と椅子とを教壇の方へ片寄せるように皆に言つてうしろの方に空地を作つた。ほかの者たちは詰められた机の間や廊下に立つていたが松木は安武と大群を呼び出して急拵てまえの小広場で向かい合わせて今の喧嘩をやり直せと言つた。一瞬の激情で殴り合いはやつても、間に時間が少し流れて、さてその続きをやれと言われても、まして舞台が作られてみなが周りを取り巻いている中で改めて殴り合えと言われても醒めてしまえばバカバカしくなってしまうだろう。二人は離れて向き合つたまま互いに目を交さずに顔をそむけたままでいるところに松木が出て来た。松木は少し笑つたようだった。二人の方へ近づいた。お前たちがやらなければというように一人づつ順々にすごい殴り方をした。右の平手打ちで左へ傾いた頬を左の手で打ち返しそれを四、五回続けて次ににぎりこぶしに替えてボクサーがサンドバッグに向うように腕を正面からくり出して顎を叩き鼻に当り鮮血が床に散つた。安武の仕置が終つて大群おむねの番になった。顔に恐怖の色が現われ大群は両手を前に出して身を衛る形になったが松木は安武の血を見て一層猛り狂つたように大群に身を寄せては顔と言わず頭と言わず胸や肩なども打ちまくつた。中学一年生はまだ少年だった。二十七才の骨格の出来上つた男と対等に渡り合うにはいささか筋の力や骨の大きさに差があるようだった。安武も大群も松木に刃向うにはまだ体力や度胸や捨身の覚悟において開きがあるようだった。力

の出し合いでもまだ松木には敵わないように見えた。委細構わず二人の少年を殴り続けた。凄惨な光景となつて来た。大群も安武もしかしそれに耐えた。音をあげず立ち向つて行くこともせず殴られるままになつていた。今だけではない、後の日がある、俗に言えば太平洋に蓋はしてないんだといった所だったのか。旧日本皇軍ではこのような形状は日常のことだったのか。そして松木は陸軍の一兵卒として自分がやられたから帰還して教場で今度は加害者としてやつてみたかったのか。生徒としての輪郭を持つ物体をこういう具合に心ゆくまで痛めつけ跪ひざまづかせ、動けなくなるまで殴り続けたかったというように見えた。女の子は五、六人泣き出していた。女子では一番出来の良かった下田フジ子も泣いていた。彼らがこの中学に入つたのと入れちがいに市立女子高は戦禍に遇つた旧校地に校舎を回復して去つたが前年度末までは下校の際、台地にある中学から崖沿いにつけられた坂を横一列に広がつて歩くのがいつもだった。その新制の中学は地名に似せて径稜と名付けられたが県立の商業学校が東の郊外に移転するまではそこを使つていたし、父はそこを出ていた。市立女子高が罹災で東半分を借りているのを知つて父は、あ、そうだったのか、だから女学生たちが横一列になつて大将でもない家来でもないというように坂を歩いていたのかと言つたことがあつた。その比喩がいかにもおかしく、又、うまく当て嵌はまっているように聞えた

ものだった。中学に行つてからは町内の少年たちは野球をしなくなったが、小学校のときはしよつ中よその町内のチームと試合をしたものだった。道一つへだてたところの、あれは四町内だったか五町内だったか、三宅の正ちゃんが居た。彼は野球部の二塁手で、町内チームでは投手をしていた。うわてからゆつくり投げってくる球は打てそうでバットの芯に中々当らず、サードゴロになつたりセカンドゴロになつたりした。何回もやったが、あるとき六対六で分けたことがあつた。楨はショートを守つていてライナーの打球が来た。父が正月に買つてくれた白いグローブを嵌めてはいたが咄嗟のことでもあり下手でもあつて右手で素手で捕球して手の平が大層痛かつた。古泉校のチームはその前年は県下で一、二を争うほど強かつた。台地の北側で、虹ガ岳連山の裾野に広がるあたりに点在する住宅群の中に建っている北花岡小学校と双壁と言われた。県下で二種類の野球大会があつて古泉と北花岡は優勝を分け合つていた。まずは北花が勝ち次に古泉が勝つた。二回とも両校が対峙して優勝を争つた。あるときこの二校が練習試合を北花の校庭でやると聞いて、あれは秋の終り頃の日の光だった。苗字は思い出せないが、みなオサアキちゃんと呼んでいた同級生にさそわれて坂を降り電車道の脇を歩き爪先上りの小坂をのぼつて、山の裾野の高みに建つ北花岡校に行つた。その日はうすれ陽まじりの曇り日で、いったいに暗い日で運動場は校舎よ

り一段低くなっていた。試合が始つてみると、さすがに二回の大会でともに決勝にまで勝ち進み、片や北花、片や古泉と優勝を分けた両チームだけに、取りこぼしの少ない、中味の濃い渡り合いになつて見物の生徒数は少なかったがオサアキちゃんとはかに四、五人居ただらうか、北花の方は地元だからもっと数は多かったのだらうが、ま、居たとしても十四、五人だったらう。軟式だから七回までだった。一対一で延長になった。日が暮れかかり光が薄くなつて引き分けにしようかという話も出たが、両チームとももう少しやろうと八回の裏になった。古泉が後攻めで八回の裏を攻めた。ツーアウトで二、三塁となった。次の打者が、三塁後方に小さな飛球を上げた。三塁手は後退してボールを追つた。暮れ方の空で見にくかったのか捕球の姿勢のままボールは三塁手のうしろに落ちた。ツーアウトだったから三塁の走者は本塁へ走つていた。延長の八回裏だから、三塁手がボールを取りそなつて、三塁走者がホームベースを踏んだときに、二アルファ対一で試合は終るのだが試合は動いていた。二塁走者も三塁を回つて本塁を目指した。ボールを拾つた三塁手は捕手へ送球してセカンドランナーはタッチアウトになつて、それでスリーアウトになり、古泉校のアルファ付きは消え、二対一の結果となった。幕切れの攻防はまことに見応えのある十秒か十五秒の場面を出してくれた。オサアキちゃんと二人で大いに喜んだ。オサアキちゃんがこ

の野球見物に誘ってくれたことは今にして思い返せば千金の値の黄金を積み上げたとしても、それを越えるものとなってしまった。古泉も頑張りそして北花も踏ん張った。最後の最後で古泉にはわずかに好運がめぐり北花にはわずかに不運がめぐった。それだけの違いが二対一の、アルファなしの数字の向かい合いとなった。ここでアルファが付かなかったということについては、まさに両校チームの技倆が伯仲していたのだった。それは楨が五年のときで野球をしていた少年たちは六年生だった。九人の選ばれた人たちは、見てみると、どうしてあれ程うまいのかと見惚れるくらいで、住んでいる世界が違うような、異界の一生物のように思われたが、繰り返しの鍛練によつては、余人にも行き着けぬことではないとその当時は解る由も無かった。投手の飯田、捕手の磨墨、一塁の島田、二塁の早田、三塁の金谷、遊撃手は誰だったろう。(内田だったか)外野手の三人も誰と誰と誰だったろう。そのあと市内でも二番目に古い校歴の古泉校は創立百周年を記念して校史が編纂されていて、そこにこのときの野球部名簿が載っていて、数年前古本屋で見かけてそのような本が出ているのを知ったのだが知っただけでその本を買いはしなかったから、あの四人の名を書くことが出来ない。金谷は六年の途中で鹿児島は大隅半島の町へ引越して行った。或いはひよつとして父親は灯台の職員で佐多岬の方かも知れんなど考えては見たが、それで